

Title	アメリカにおける中国古典詩の研究：一九六二年から一九九六年まで
Author(s)	ニイハウザー・Jr, ウィリアム・H; 川合, 康三
Citation	中国文学報 (2000), 60: 142-155
Issue Date	2000-04
URL	https://doi.org/10.14989/177850
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

アメリカにおける中國古典詩の研究

——一九六二年から一九九六年まで——

ウイリアム・H・ニイハウザー・Jr

ウイスコンシン大学

第二部 (中)

ジョナサン・チェイヴス Jonathan Chaves の『梅堯臣と宋代初期の詩の發展』“*Mei Yo-chen and the Development of Early Sung Poetry*” (New York: Columbia University Press, 1976) においても、韓愈と孟郊は大きな役割を果たしている。それは唐代のこの二人の詩人が梅堯臣(二〇〇二—一〇六〇)と彼の作品に強い影響を及ぼしているからだ(索引によれば、韓愈と孟郊への言及は四十八カ所にのぼる)。チェイヴスは『梅堯臣』のなかで梅堯臣の詩の背景や状況を説明するためにたくさんの詩人を論じている。梅堯臣の傳記は第一章で扱われ、それに續いて宋代初期の詩が概説され、傳統に對する梅堯臣の反發が論じられ、そしてその

詩の理論(中心となる概念は「平淡」である)が明らかにされている。最後の章では、日常生活、社會への發言、妻の死の悲しみ、様々な生き物(蚊、ミミズ、ウジ虫、シラミまで含む)の描寫、美術や考古學的な對象物の詳細な再現、そうした詩の翻譯と緻密な讀解が提示されている。梅堯臣は「現實詩人」(二二九頁)であるとチェイヴスは言う。この本の結論は簡單明瞭である。梅堯臣の多様な作品を檢討して、その詩の性格をもとに「中國文學史における重要な位置」を確保し、「のちの宋詩の顯著な發展」(二二〇頁)へ影響を及ぼしたと意義づけようとしている。

それゆえにこの研究はモウトの高啓に關する本の方法にならっている。それは「中國において偉大な作者のなかに數えられない」^①詩人を取り上げているのだ。しかしチェイヴスは「我々は唐代や宋代に生きている中國人ではないから、我々の選んだものが、……昔の中國で選ばれたものと必ずしも一致しないのは不思議でない」(序 vii 頁)と語っている。

チェイヴスはもともと翻譯家である。「田家語」詩(一

六五—二六六頁)の解釋に見えるように、その緻密な讀解は、皮肉なほのめかしを指摘したり、引用された詩句を指摘したり、細部を取り上げてゐる。時には當該の詩の主題に關わる別の作品を讀者に示すこともある。しかしたとえばオウウエンに見られるような、長々とした敘述はない。とはいえ、この本には梅堯臣の詩のみならず、宋初期の詩の流れに沿いながら、先行する人々や同時代の作者の多くの翻譯が含まれている。そして宋代の詩を現代のアメリカ英語に效果的に翻譯する簡明な言い回し、直截な記述がなされている(私の見るところでは、バートン・ワトソンの最も優れた翻譯は宋詩である)。この研究におけるチェイヴスの翻譯を見ると、この本は本人が言っているように「注釋を付けた梅堯臣の詩のアンソロジーを本質とする」〔序〕viii頁)だけでなく、ジョナサン・チェイヴスがアメリカにおける中國詩のすぐれた翻譯者であることを示している^②。

ジョナサン・チェイヴスは梅堯臣の比較的「シンプル」な詩の翻譯で讀者を満足させることができたが、ドナル

アメリカにおける中國古典詩の研究(ニイハウザー)

ド・ホルツマン Donald Holzman の『詩と政治——阮籍の生涯と作品』“*Poetry and Politics: The Life and Works of Juan Chi*” (210-263) (Cambridge, England: Cambridge University Press, 1976)^③は、阮籍と彼の作品を西歐の讀者に説くという、はるかに困難な仕事に向き合ったのである。ホルツマンが「序文」で記しているように、「阮籍は中國の偉大な詩人のなかで、どのような深さであれ、最も理解がたい一人である。その語彙は比較的少なく、その語法は正しく理解しがたいほど單純であるが、その意味はいらだたしいほどにつかみにくい」(vii頁)のである。残念なことに、同じくらい把握しがたいのが、ホルツマンの阮籍に對する事細かな敘述である。それは他の書物や作者について歴大な言及をしているのだ。ホルツマンは有名な「詠懷詩」だけでなく、他の散文作品についても、極度に周到な熟讀をしている。

ホルツマンは「印象主義的な、……リットン・ストレイチー(譯注 一八八〇—一九三三、イギリスの傳記作家)のよ
うな傳記」(二頁)と彼が呼ぶものを避けて、その研究を

三つの部分に整理している。「政治」(一章—三章)、社會(四章—六章)、内面生活(七章—十一章)である。著者は阮籍が「國家の政治に加わるといふ、すべての中國の詩人に見られる中國的なエートス」(vii頁)を持つていと語る。しかしながら、その時代の不安定な政治情勢(同時代の十人の優れた詩人が政治的理由のために處刑された〔七頁〕)に際して、阮籍は詩のなかで同時代の人々をほのめかす言ひ方を用いるが、それを理解することは「しばしば不可能」なのである。不死の追求に關わる詩もあるが、その方が説明しやすしい。「詠懷詩」の第十首(首句「北里多奇舞」)がその例となろう。ホルツマンは言う、

この詩もまた三世紀の洛陽における、情熱的な若者たちに對する諷刺であるように見える。それは阮籍自身の若い日の放蕩の、個人的な追憶であるかも知れないが。詩人は若いプレイボーイたちのつかの間の遊びと、詩人の「唯一の慰め」である不死の生命の永遠性とを對比させる。「焉見王子喬、乘雲翔鄧林」の句において)王子喬が空を翔る背景として鄧林を選んだこ

とは特に興味深い。鄧林は太陽との、すなわち阮籍自身のイメージのなかでは(第三十五頁)時間との競走に勝とうとした人間の遺跡である。王子喬は林を超え、時間を——遊び回つてゐる若者たちがエネルギーに消費している時間を、超えるのだ。(二六二頁)

散文作品も同じように周到に扱われている。散文についての注釋は、詩の注釋と同じように、過去の、また近代の學者が存分に引かれてゐる。しかし、時には、ホルツマンは新たな讀みによつてこうした専門家を超えている。たとえば、「大人先生傳」にあてられた章(二八五頁—二〇六頁)のなかで、彼はこの長い、むずかしい作品を翻譯し、それを阮籍の「内面生活」に結びつける。この作品の「囚われない老莊思想」と他の多くの作品の「苦惱に満ちた儒教」との矛盾に悩みながら、ホルツマンは散文は曖昧さを避け、詩は曖昧さを利用して開花するという吉川幸次郎の説明を引いたあとに、こう述べる。

しかし、吉川の區別が重要で意味あるものであるにせよ、私はそれが阮籍の作品の眞の矛盾を解き盡くし

ているとは思わない。……それは單に散文における一貫性や詩における矛盾、曖昧さの問題ではない。阮籍は作品のなかで、そして作品ほどではないが人生においても、二つのまったく異なった、そしてしばしば矛盾する態度を提示しているのである。「大人先生傳」や他の散文作品のなかでは、社會における極めて多くの奇妙な態度と同じように、彼は「老莊思想」——絶對的自由への切望を表現しているのである。……そして多くの詩においては、時の推移、王朝の没落、人間の殘酷さを悲しみ、それは彼の「儒教」——高潔、君主、仲間たちに平和で幸福な暮らしを授ける社會生活に對する切望を表現している。阮籍の存在のこの兩極を調和させる手だてはないと私は思う。それらはどちらもはなはだ人間的であり、程度の差こそあれ、我々のすべてに見いだされるものだということ以外には。

(二〇五頁—二〇六頁)

こうした敘述は阮籍の専門家にとって價值をもつものだが、一般の讀者はホルツマンを傳記作家として——上に見

アメリカにおける中國古典詩の研究(ニイハウザー)

たように、著者は否定する役割であるが——歡迎するであろう。そうではあるが、ホルツマンが阮籍の逸話を扱う手並みは、このしつかりした研究の最も魅力的な部分を作りだしている。たとえば、阮籍の「反—儀禮主義」に關する章では、阮籍が喪に服している時、嵇康(二三三—二六二)の弟の嵇喜(譯注 嵇喜はふつう嵇康の兄とされているが、『文選』五臣注の張銑は弟とする)がお悔やみを言いに來たのをどのように追い返したかを、ホルツマンは詳しく語っている。阮籍は泣くことを(それが禮儀になつたことであるが)拒否し、瞳を丸めて坐り、困惑した嵇喜に對して白目だけを見せるのである。そのあとに嵇康が酒と琴をもつて訪れた時には、阮籍は喜んで迎え入れた。ホルツマンは言う、

阮籍が眼球を操作したことは、中國の傳統のなかでよく知られている。……阮籍がその小さないたずらをするようにしたか、それこそが歴史の小さな祕密を(幸運にも)残している。彼はおそらく眼球をそのように動かす技術があつたので、瞳は全部まぶたの下に

隠れたのだろう。(マーティン・チャズルウィットにおける) グランブ夫人は同じような目の動きを自慢にし、シエイクスピアが「白目の怒り、すなわち激怒」(『ジョン四世王』ⁱⁱⁱ、四九)と書く時、阮籍の「白眼」と同じようなことを言っているのだろう。阮籍がそうした時、それはおそらくぞつとするものであつても、うるさい訪問者を政治的に妥協することなく追ひ拂うのに見事になつたやりかたであつたことであろう。それはまた彼自身が「境界を超えた人」であることを示すすぐれた方法であり、グロテスクなその行爲は、證據となる異常な筋肉の機敏な動きとともに、阮籍が道教徒の傳記のなかによくある、緑の髪、赤い目、毛むくじやらの肌をもつた、超現實的な不死の人々と類似していることを示してもいる。そして自分も不死を求めていた嵇康を惹き付けたのは、まさにこの手のグロテスクさであつた。嵇康が酒壺と琴をもつてあらわれたのを見た阮籍は、一目見て同じ精神の持ち主とわかつた。というのは、「境界の内側の人間は誰も、喪

中の人と音楽を楽しんだり酒を飲んだりしようと思わない」からである(八〇—八二頁)。

このような一節があるために、そしてまた阮籍というわずかしい文學者の研究に取り組むことを後續の研究者が躊躇しているために、ホルツマンの研究は今日に至るまで、西歐における阮籍研究の典範として生き續けている。

中國の傳統的な文學批評に立脚した研究書から、西歐近代の觀念と中國古典とを結びつける視點を通して中國古典詩を探求しようとした研究へ目を轉じることにしよう。

ポーリーン・ユイ Pauline Yu の『王維の詩——新たな翻譯と注釋——』“*The Poetry of Wang Wei: New Translations and Commentary*” (Bloomington: Indiana University Press, 1980) である。書評のなかには、豫備知識を與える「批評の前書き」(一一四二頁)を、それに續く王維(七〇一—七六二)の詩の研究と同等に評價するものがある。この前書きはユイ(そして彼女の師である劉若愚)が「文學の形而上的理論」と呼ぶものを概觀し、續いてその理論を西歐の象徴主義、ポスト象徴主義の批評と比較し、最後に

現象主義的な文學批評が王維の詩の研究にふさわしいことを説明している。

この第一章は近代西歐の視點からいかに中國古典詩を讀むかという議論に重要な貢獻をするものであるが、(そしてだからこそ、その概觀の第一部で論じられているのだが)、ユイが丁寧を選んだ百五十首の王維の詩、そしてまた彼女の翻譯と解説、それによつてこの本は王維の詩に關する西歐の規範となつた。以前の西歐の批評が、王維の生涯の隱逸的な要素やそこから生まれた詩だけに焦點を絞つていたのと違つて、ユイの觀點はそれをきれいに清算している。

王維は公的な務めを完全に斷ち切るような中斷をしたことは生涯において一度もない。隱逸可能な場所として彼が擧げているのは、その時彼が占めていた地位に極めて近接していたことは確かなのだ。そして王維は完全な隱逸者としてよりもむしろ、朝廷と田舎の二つに自分の時間を分けることにたどり着いたように見える(四六頁)。

アメリカにおける中國古典詩の研究(ニイハウザー)

さらに、王維の新たな研究がなぜ必要かの説明は、人生を完全に見ることが詩を完全に理解することになるということを前提としているゆえに重要である。それは彼女の方法のなかに、傳記として詩を讀むという傳統が流れていることを明らかにしている。

王維は二十世紀の中國・西歐の文學研究において奇妙な立場を占めている。一方では、唐代(六一八一—九〇七)の大詩人の一人として廣く認められた地位にもかかわらず、……どの國においても廣範な文學研究の主題となることはほとんどなかつた。二次的な資料が相對的に缺けていることにはいくつかの理由が考えられる。……(1)王維の詩は表面的には讀者に解釋の餘地がのこされていないほど單純である。しかし、逆説的に、よく見直してみると、そこにはわかりにくい哲學的な基盤があることに気づき、それは批評的分析をする氣をくじくものである。しかしこのように無視されるもつとも適當な理由は、少なくとも中國においては、教訓的な文學批評——それはかつては儒教であり、現

在はマルクス主義である——が支配するという傳統である。そのために文學作品を傳記を書くために使ったり、文學の外側の立場から評價したり、その時代の社會や政治的狀況を反映し批評するものとして詩を捉えることになるのである。(xi)

ユイの本の章題は、よく知られた自然を詠じた詩だけでなく、作品の全體に注意を拂つたことを示している。第二章は「青年期の作品とその他の文學的な試み」、第三章は「宮廷詩」、第四章は「佛敎的な詩」、第五章は「自然を詠じた詩」である。青年期の詩の一つ、「過秦皇墓」の分析を引けば、ユイの現象學的な方法がいかに成功を収めているか、讀者は理解できることだろう。

墓所を訪れることは、時間に対する思いを生じさせると我々は思うが、しかし王維の態度は概して複雑で曖昧である。たとえば、一方では、時間の推移に對する人間の傷つきやすさを言う。皇帝の壯大な陵墓も單なる草深い丘陵になつてしまふ、と。……しかし、一方では、王維はまた宮殿の模型がまだ存在しているの

だから、皇帝は策を弄して時間を超越したということを示すこともある。模造の鳥が冬の隠れ家からふるさとへ「飛ぶ」春が靈廟にはないとはいつても、或る意味では、その鳥たちは實際には歸る必要がないのだから、逆説的に自然の鳥を凌駕しているのだ。イエーツの「ビザンティウムへの航海」のなかの金の鳥が、季節の周期にも動かず、影響されず、いつもそこにいるように(四八頁—四九頁)。

デイヴィッド・R・ネクタス David R. Knechtges の重要で大部の『文選』譯注を、ここで記しておかねばならない。現在までのところ、『文選』“*Wen xuan, Or Selections of Refined Literature, Vol. 1*” (Princeton: Princeton University Press, 1982; V. 2, 1987. V. 3) は、すべて賦のみであるが、今後刊行される卷には、そのアンソロジーのなかの多くの重要な詩が含まれることであろう。

ダニエル・ブライアント Daniel Bryant の『南唐の抒情詩——馮延巳と李煜』“*Lyric Poets of the Southern Tang, Feng Yen-su, 903-960 and Li Yu, 937-978*” (Vancouver:

University of British Columbia Press, 1982) は、ポーリー
ン・ユイの王維研究と同じように、李煜と馮延巳に關する、
文學批評であると同時にアンソロジーでもある。ブライア
ントの序文によると、彼は斷續的に數十年間、その翻譯に
携わつてきたという。彼が李煜を選んだのは、もともとは、
中國語を學び始めてほどない頃、臺灣で注文した書物の大
きな荷物の中で「一番薄い本」であつたからだという。

この控えめなユーモアは、前書きの全體にわたつている。
その中でブライアントは、李煜の詩はその生涯のコンテキ
ストのなかにおいて見られてきたにすぎないし、馮延巳の
詩は不公平にも無視されてきた、その作品を同じ時代の最
も完成された詩人たちと對照しながら、李煜の詩の幅を完
全に解き明かそう、という彼の本のコンセプトとその必要
性を説明している。前書きはまた、因襲的要素に満ちた

「詞」を西洋の讀者に翻譯することのむずかしさについて
も述べている。この本の讀者のために、ブライアントは複
雑な音の型（翻譯にはすべて漢字の復元された發音が付さ
れている）、そしてまた初期の詞における入り組んだ感覺

アメリカにおける中國古典詩の研究（ニイハウザー）

について説明している。それから詞のモデルとして馮延巳
の「鵲踏枝」第十三首を擧げる。

この詩が指している狀況を納得できるかたちに首尾
一貫してつなぎ合わせることは可能である。棄てられ
た美女の悲しみは酔つたあとに目が覺めた時が最もふ
さわしく、泣いても何の助けもなく、化粧をくずした
涙の滴をぬぐつて（もともとは涙の痕を暗示しようとして
定型詩のなかで使われている）、樓上の見晴らし
のきく場所に立つて無關心に通り過ぎて行く人々、戀
人との間に立ちはだかる山々、春のそよかせの吹くが
ままに散つていく花を見つめる。しかしこのような映
像は詩を全體として見た時に初めてあらわれるものだ。
一連のイメージや印象として捉えると、その効果はア
イロニーや斷續によつて引き延ばされ、緩和させられ
た、ばらばらで不確かな展開の一つである。詩のなか
に組み込まれた緊張は、その簡潔さを考慮にいれると、
はなはだ複雑である。まばゆい壁と時計の水滴が強く
意識されたあと、酔つて前後不覺になつた状態があら

われる。感情の「一つのしみ」がお化粧のあとの多くのしみを導き出す。悲しみを偽るお化粧は、人前で魅力的に見せようとしてのことだが、孤獨のみじめさをあらわす汚れたしるしになってしまふ。最初のスタンザでは苦しいものである春の思い（戀）は、次のスタンザでは吹き續ける（春の、それゆえにロマンティックな）東風と結びつくが、もはや會う機会はない。戀を呼び起こすそよ風は、また花を散らせてしまふというアイロニー……。(xi—liii頁)

この箇所は、西歐の中國詩研究がいかに入り組んで興味深い読みをするかの見本になるだろう。残念なことに、この本の詩の大部分は何の分析も付けられていないので、讀者は自分自身の力とブライアントの前書きに頼って、このりの翻譯を解釋しなければならない。

エリニング・エイド Elling Eide の『李白』“*Zi Po*” (二卷
Lexington, Kentucky: Anvil Press, 1984) は中國古典詩の詩人を文學批評的な前書きと翻譯によって取り上げた三冊目 (ポーリーン・ユイとダニエル・ブライアントに續いて)

の本である。エイドの「譯者注記」は、短いものではあるが、第二卷の全體をまとめ、著者が李白研究に傾注した年月を思わせる。實際、この翻譯とは別に、エイドの一九七三年の論文「李白について」“*On Li Po*” (“*Perspectives on the Tang*” 本稿第一部参照) はアメリカの研究者による李白研究のなかで現在でも最も重要な成果である^④。

翻譯は明らかにこの本の中心となるように意圖されている。五十首が譯されているが、そのうちの半数はこれまで西歐の言語に譯されたことがなかったものである(そのなかには李白の作とされる五首の詞も含まれている)。その翻譯は美しい紙に優美に印刷された優雅な詩となっている事實、この二卷の本はイラストやローレンス・E・R・ピッケン Laurence E. R. Picken によって復元された唐代の音楽のレコードも添えられて精妙に作られたものであり、それがすべて中國の傳統的な製本のなかに收められている。これは上製本を作る小さな出版社、アンヴィル・プレス Anvil Press で製作されたものである。唯一の缺點は、その本が廣く行き渡らなかつたことである。

これは二重に不運なことだ。というのは、「譯者注記」にはいくつか興味深い指摘が含まれているからである。たとえば、エイドは言う、李白は「唐代の最も目立つ詩人」であり、その「生涯」は二つの理由によって異例である、という。(一)進士の試験はその時代においては受けることがぜひ必要であったにもかかわらず、彼は一度も受験しなかったこと。(二)彼はその時代の人々から天才として喝采を送られた、中國の詩人のなかではきわめてまれな人であったこと。「前書き」には引喩、色彩のイメージ、韻律、語呂合わせなどについて、さらに多くの記述がある。最も刺激的な議論と思われるのは、李白の詩におけるジョークに關するものであろう。

こうした詩を読む中國の讀者は誰でも、傳説上の西王母が瑤池のほとりに侍女たちとともに住み、そこで不死の桃を育てていることを知っているだろう。しかし讀者は「襄陽歌」に一貫するエロティシズムについてはいささか困難を覚える。「龜の頭(龜頭)」の卑猥な意味がそこで何を連想させるか、西洋人は口にしよ

アメリカにおける中國古典詩の研究(ニイハウザー)

うとはしないし、「秦女卷衣」について、李白が『詩經』の一語を加えたことよって最後の二句をあくからさまにみだらなものにしたことに注釋家が言及しないまま解釋していることに對して、中國の讀者は何の疑問も抱かない(七頁)。

このような指摘は、問題の詩を完全に解釋するためにはさらに多くの細部が必要ではあるが、しかしエイドの早期の研究である『李白について』にはどのような洞察がみられるかを示すものであるし、また近い將來、エイドが彼のライフワークである李白研究に戻る時間ができることを期待させるものである。

ロナルド・C・エーガン Ronald C. Egan の『歐陽修の文學作品』『*The Literary Works of Ou-yang Hsiu (1007-72)*』(Cambridge: Cambridge University Press, 1984) は、歐陽修の文學資料と、考え抜かれた明快な解釋とがバランスよく示されている。「前書き」のなかで歐陽修の生涯の概略を述べてはいるが、エーガンは上述の多くの研究にはつきり表われていた「傳記的批評」を拒絶するのである。この拒

否はエーガンの傾向によるのではなく、歐陽修自身の作品に起因している。

歐陽修の詩を全部讀むと、どんな時期においても彼はいくつかの異なつた詩型を用いている。歐陽修の詩を論じる時には年表を頭に入れておかねばならない（彼の二度の左遷はことに重要である）が、彼の多様な詩型が作られた軸としては役に立たない。

この本は傳記よりも、その書名があらわしているように、歐陽修の作品、そしてその文學的なコンテキストに焦點を合せている。エーガンは散文、詩、賦、詞に章立てしている。賦と散文に對して普通以上に力を入れていることは重要である。というのは、エーガンが書いているように（八一頁）、歐陽修は詩を輕視する初期の宋代古文家の一人だからである。彼は詩は八百首しかのこしていない（同じ時期の梅堯臣の詩は二千八百首ある）。そして詩というジャンルは、エーガンの考えによれば、「歐陽修の文學遺産のなかで最も印象の弱いもの」（八一頁）なのである。

歐陽修が詩を輕んじたように、エーガンも歐陽修の散文

の分析においていつそう潑刺とし、力を注いでいる。その證據には「養魚記」についての次の記述がある。

明らかに歐陽修はここで自分自身と魚との類似を語っている。彼自身もまた「存分に自己を發揮する」ために、現在置かれてるよりもいい環境を與えられべきだと思つてゐる。しかし彼は現在の苦境のなかでも満足を見つけることができるほどのめかす。下僕は人の生きる歡びは外的な環境によるだけではないということを愚かにも理解できない。この作品はこのようにして歐陽修が絶望を避けるために宋學と関わつてゐることを示している。

しかしながら、こうした意味が確かに示されているにもかかわらず、含蓄された意味を指摘するだけでなく、文字通りの意味が、それ自體として重要である。歐陽修は池そのものにあまりに多くの時間を費やすので、我々にはそれが單なる寓意的な工夫にすぎないとは思えなくなる。言い換えれば、含蓄された、つまり二次的な意味は、一貫する池のイメージや作者がそれ

を楽しんでいることを消してしまうほど押しつけがましくはないのである。歐陽修が跳び上がる魚を書いてゐるのは、その點で、柳宗元のアンソロジーによく採られる「種樹郭橐駝傳」のような作品とは異なる。ここでは作者は庭作りを本當の主題である政治の單なる比喩として取り上げていることが明らかなので、讀者は表面上の主題である庭作りの技術を頭のなかに閉じこめておくように強いられるのである（四一頁）。

翻譯と緻密な讀解を通して、エーガンは「記」のジャンルにおいて、歐陽修の個人的な、主觀的な表現の大膽さが最もはつきりとあらわれる」（三五頁）という主張を解き明かしている。（この章で論じられている十六篇の散文の翻譯がさらに付載されている。）

全體として、エーガンは歐陽修の作品のなかに見つけた「明るさ」を自分の本のなかに見事に反映させている。理論的な資料に拘束されずに、歐陽修の複雑な作品と文學史のなかで勝ち得た位置について、注意深く、バランスよく説明しているのである。

アメリカにおける中國古典詩の研究（二）イハウザー

ロナルド・C・エーガンの歐陽修の寓意に関する研究からジェフリー・R・ウオーター Geoffrey R. Water の『楚辭の三つのエレジー——『楚辭』の傳統的解釋序論』“*Three Elegies of Chu-An Introduction to the Traditional Interpretation of the Chu Tzu*” (Madison : University of Wisconsin Press, 1985) に移ることにしよう。その本は「九歌」（ウオーターの譯によれば、Nine Elegies）のなかの最初の三つについて、寓意的な讀み方を提示しているのである。そのアプローチを辯護するために、ウオーターは前書きの「方法」の節において次のように記している（一九頁）。

昔の中國の文學者は博大な學問を備えていた。歴史をつぶさに知り、古典を暗誦していた。官人として不可欠な能力の一つは、千冊もの書物を筆先で書けることであつた。このような背景のもとに、傳統的な注釋やテクストの解釋が生み出されてきたのである。

意味は言葉には出されていない何かを指し示すことによつて明らかにされ、増幅される。それが「引喩 allusion」といわれるものである。我々が今日出会う

問題は、想定された讀者には明らかなさうした引喩が、今日の我々にとつてはわからないことだ。西歐の讀者にとつてハンデイキャップであるのみならず、中國の完全な知識人も例外ではないのである。

これは十分に理由があることと思われる。ウォーターはさらに「文章や圖は讀者が文脈から類推することを通して、いくつかの正しい意味をもつことがあり」（二二頁）、讀者はいっそう不安になつてしまふという。しかしウォーターは王逸（八九頃—一五八頃）、五臣、洪興祖（一〇九〇—一一八五）、朱熹（一一三〇—一二〇〇）などの傳統的な注釋によつて讀みを確實にしようとする。

ウォーターの本の大半は、最初の三つの歌とそれについての四種の注釋の翻譯によつて占められている。彼は作品のそれぞれについて二種類の譯を付けている。「逐語譯」つまり一語一語を對應させた譯と、「詩句のより完全な、明晰な意味」（二七頁）を明らかにした「パラフレーズ」である。ここにいう「より完全に明晰な」意味とは、つまりは政治的なアレゴリーということになる。かくしてそのタ

イトルの「九歌」は逐語譯では「九つの悲歌」となるが、しかしパラフレーズでは「政治的などん底における私の切なる思い」（三二頁）となる。「東皇太一」の最後の二句は、ウォーターの翻譯では次の如くである。

五音紛兮繁會、君欣欣兮樂康

逐語譯：五つの音があふれんばかり。混亂し、混じり合ひながら。

君主は楽しんでゐる。幸福に、そして満足して。パラフレーズ：音樂は混亂し、無秩序な騒ぎになつた。

しかし王は大いに喜んでゐるのか、満足して氣にとめない。（七八頁）

ウォーターは最後の句を『孟子』梁惠王下の「今王鼓樂於此」で始まる箇所に基づくことによつて「満足して氣にとめない」と譯している。「欣欣」という複合語がこの箇所にあられてはいるが、そしてまたその箇所は音樂について語つてゐるものではあるが、「東皇太一」の最後の句を、その文字通りの意味のみならず、「樂康」という複合語をも無視して、このような理由でゆがめて讀むことには、

納得できない読者もいるだろう。

しかし、「九歌」から時局に關わる、政治的な意味を無理矢理引き出すこの傾向があまりに極端に見えるならば、パラフレーズした譯を讀まないことにするだけで無視することもできる。そこにのこるのは、『楚辭』の場合、傳統的な注釋（ここにはすべてが完全に譯されている）が古典を讀む際にいかに役立つかという貴重な研究である。

- ① 一連のそうした本は、一九七〇年代から八〇年代初めにかけて、トウエインの『トウエイン世界文學全集』*Twayne World Author Series*のなかで刊行された。それにはマリー・チャン Marie Chan の『高適』*Kao Shih*, 一九七八年、ウィリアム・H・ニイハウザー Jr. William H. Nienhauser の『皮日休』*Pi Jih-shiu*, 一九七九年、リチャード・J・リン Richard J. Lynn の『貫雲石』*Kuan Yun-shih*, 一九八〇年、ジョン・バーニー John Marney の『江淹』*Chiang Yen*, 一九八一年などを含んでいる。
- ② ジョナサン・チエイヴスの翻譯のいくつかについては、文獻目錄を參照。

③ パリの高等研究院の副所長が書き、イギリスで出版されたこの本を、アメリカにおける中國詩研究を紹介するこの文のなかで扱うことを、疑問に思う向きもあるかもしれない。し

アメリカにおける中國古典詩の研究（ニイハウザー）

かしホルツマンはアメリカに生まれ、アメリカで教育を受け、彼の學問は阮籍研究で一九五三年に學位を取ったイェール大學の學風を反映しているのである。

- ④ 李白が英語圏の讀者になぜ好まれなかったかという問題は複雑であるが、アーサー・ウェーレーが『李白の詩と生涯』*The Poetry and Career of Li Po 701-762 A. D.* (London: George Allen and Unwin, 1950) のなかで示した否定的な態度とおそらく關係しているだろう。

⑤ 『楚辭』に關しては研究が極めて少ないので、この本はアメリカの讀者にとつてなおさら重要である。アメリカの研究ではないが、デイヴィッド・ホークスの改訂された翻譯と研究、『南の歌——屈原及び他の詩人による古代中國詩のアンソロジー』*The Songs of the South. An Ancient Chinese Anthology of Poems by Qu Yuan and Other Poets* (Harmondsworth: Penguin, 1985) はここに記しておかねばならない。それは『史記』屈原傳の元になった資料とその成立過程をホークスが全面的に改訂し、鮮やかに分析したものととして、とりわけ興味深い。

(川合康三 譯)